



はじめに

新年も1ヶ月も過ぎると正月三が日の楽しかった思い出などはるか昔に感じます。年を取ると「一年がものすごく早い」と言われていましたが本当ですね。切実です。さらにコロナ禍のためになおさらです。

「一年の計は元日にあり」「一日の計は朝にあり」「始めが肝心」「千里の道も一歩より」などのことわざを口記帳の最初のページに記帳して今年が始まりました。ことわざを日記帳に書き始めたのは実は昨年からです。きっかけは馴染みの薬局から「日めくりカレンダー」を貰ったからです。昔は口めくりカレンダーをよく貰ったり見かけました。私にとって本当に久しぶりの日めくりカレンダーでした。更によく見てみると色々書いてあり、そのなかのひとつにことわざがありました。それで、日記に書き残せば面白いと閃きました。

毎日書いているうちにことわざを分類したくなり分類しつつ楽しみました。たとえば「心理・社会」「家族・教育」「自然」「健康・身体」等々です。「健康は人生最大の資産である」は健康・身体に分類に記入します。

さらに、興味が湧き単行本をさがしてみると沢山ありました。「ことわざに強くなる本」「ことわざの風景」「ことわざ万華鏡」「ことわざ社会心理学」などは手元に、さらに、今から60年前のベストセラー池田弥三郎著『日本故事物語』まで集めてしまいました。記憶力も衰えていますので今後どうなるか分かりませんが継続したいです。

1. 過去から学ぶ難しさーインパール作戦（3）

昨年から東大和市遺族会の理事になりました。理事と言っても名前だけで仕事は会報を配達するだけです。上部団体は日本遺族会ですが今の若者には交通事故の団体と間違われる事もあるようです。

遺族会の歴史は古く、戦後間もなく発足していますから75年以上になります。戦死したあとに残された家族の生活困窮を教済するためと戦死者の名誉を回復などが目的でした。

私はズーっと入会せず、入会したのは4年前です。本当に遅いです。その理由は日本遺族会の政治姿勢に疑問を感じていたからです。

それでも入会したのは遺族が高齢化しこのままでは消滅の危機にあるからです。配偶者はほとんど成仏され、遺児も76歳以上です。東大和市遺族会も例外ではない。

かっこよく言えば義侠心ですね。会報配達や年会費徴収などで手助けしたいただけでした。しかし、1年間理事をして理解した事は戦争という残酷さです。表面的には「幸せ」に見えても心の底に消える事のない悲しみを抱えていることでした。同じ立場にある私には心底理解できました。少しでも寄り添えたことがささやかな成果でした。本当に戦争はダメです。

「インパール作戦」について

インパール作戦については 2 回ほど書いてきましたが、簡単にまとめてみます。

・1944(昭和 44)年 3 月 8 日から 7 月 4 日までの約 4 ヶ月間ビルマ(ミャンマー)での戦いでアジア・太平洋戦争中最悪の作戦であり最低の司令官牟田口廉也中將であると評価されています。

・作戦参加兵士約 10 万人。戦死者 3 万人。戦病死者 4 万 5 千人。生還者 2 万数千人。戦死者も多くは突撃・弾薬なし・自爆。戦病死者の多くは退却中に餓死・マラリヤなどで死亡し病院ではない。私の父親も北部のメザの野戦病院で亡くなっているが本当の事はわからない。戦友という方が口頭で話したのを根拠にしているだけです。

・作戦の目的を列挙すれば悪い事はない。むしろ勝つためには当然です。しかし、スポーツでもそうですが、計画や理想だけでは勝てないのは当たり前です。まして戦争。

・敗戦を詳しく分析すると、軍人のおごり、出世欲、情報不足、精神論、人命軽視、上意下達、科学論無視などが欧米諸国より徹底的に違っていたことです。

・このようにインパール作戦については史上最低、最悪の作戦として名高いのですが、敵国イギリス軍はどのような状況であり、戦ったのかは資料不足でした。それが下記の参考書が発行されたのでそれを基に書いてみます。

・2013 年 4 月英国の国立陸軍博物館企画で「グレイテスト・バトル」になんと「インパールの戦い」を選出したのです。それもノルマンディー上陸やナポレオンを破った「ワーテルローの戦い」を抑えてです。

・それほどイギリス軍は切迫した状況であったというのです。なぜなのか？

インドの独立運動が激化して英国の東南アジア古領政策が破綻する寸前だった。その状況は書ききれませんが、歴史に「もしも」があれば日本軍も勝機があったかもしれません。

しかしながら日本軍は惨敗します。その原因はすべて軍人指導者の恐るべき信念と外交無知にあると思います。興味のある方は下記の参考文献をよんでください。

参考文献：笠井亮平『インパールの戦い』文春新書 2021 刊。

保坂正康著『あの戦争は何だったのか』新潮新書 2005 年刊。

2. 現在の息苦しさーオリンピックとコロナ

オリリンピックが終わりました。もう忘れていても多いと思います。勿論、昨年 7 月 23 日から 9 月 5 日の開催期間ですから忘れていないはずはない。しかしながら次のことはどうでしょうか。私は手元にあるオリンピック関連の資料を処分・整理していて以下の事を思いだしました。これらの事は無視できない、忘れてはいけないことだという意味です。



インパール作戦 (Wikipedia.com)

- ・東京五輪誘致の「復興五輪」「アンダーコントロール」延期後の「コロナ過を克服した証し」などのキャッチコピーです。
- ・新国立競技場案の白紙撤回、エンブレム問題、贈収賄事件、マラソンコース変更、無観客競技、食料品や備品の大量廃棄など
- ・五輪コストはいくらかかったのか？

2013年の招致時の開催経費の見積りは7340億円。閉幕後の9月時点での公式の大会経費は1兆6440億円。これを都・国・大会組織委員会の3者で負担します。その他に暑さ対策などで大会関連経費として都はすでに7349億使っています。都の財政は「コロナ対策で5兆円超支出し火の車」と幹部はっています。

- ・緊急事態宣言下のオリンピック開催、女性蔑視発言など。

上記のほかにもありましたが全て将来の日本・東京都・国民に係るものばかりです。宿題のように感じます。「お祭り」だけで終わっては余りにも重いです。

私は1964(昭和39年)の東京オリンピックを教師として迎えています。テレビはどの家庭も白黒でカラーテレビは金持ち家庭だけでした。学校のテレビも当然白黒で職員室に1台だけです。その当時のオリンピックは今回と違って東京の姿が劇的に変化した時代です。まだまだ日本は貧しく工業化国家へ邁進する途上でした。それだけに「五輪の華やかさと外国人との一体観、スポーツの魅力」に魅了され「あの輝かしい時代、または希望に満ちた時代」国家と人々の一体感の熱気はすさまじいものでした。私もそのひとりでした。



しかし、影の部分も知るべきだったのです。聖火リレーは沖縄から始まったのですが当時沖縄は米国の統治下にありました。「東洋の魔女」の女子バレーボールは日本紡績貝塚チームが主体でした。当時の輸出産業は紡績であり女子行員が多数働いていました。現在の東南アジアの工場働く姿を思い出してください。「俺についてこい」の大松博文監督も有名で流行語になりました。練習法は今ならハラスメントの部類になるでしょう。ちなみに、大松監督はインパール作戦に従軍し生還した軍人です。

「もう走れません」という遺書をのこして自殺した円谷幸吉男子マラソン銅メダル選手のことも忘れられない。自殺した背景や遺書の内容を知ると影の部分が鮮明になります。

今回のオリンピックは影の部分を置き去りにして光の部分「輝かしい五輪」のみを求めて開催されその期待を裏切るものでした。

しかし、国民の五輪開催に関するアンケートでは「反対」から「良かった」と開催後は賛成へとなっています。メダル数、選手の感動、ボランティア活動、日本人のち密さなど自画自賛の要素は沢山ありましたから当然でしょう。

しかしながら、開催後の負の遺産(レガシー)をしっかりと見つめる事は絶体必要です。長野冬季オリンピック開催後総括・検証しようとした時に都合のわるい書類を破棄・焼却して分からなくなりました。残ったのは莫大な負債と施設維持費だけにならないように願いたい。

継続して欲しいのはパラリンピックの理念です。公正、多様性と調和、社会の実現、個性の尊重などで

す。大会や言葉だけで終わらせないでください。

開幕後、障がい者スポーツ協会に「何か関われないか」「支援したい」の申し出や障がい者の「自分も競技をしたい」相談も増えているそうです。

関心度は五輪と差がありました。視聴率はよくて10%、大体はひとけた台ですからまだまだです。またパラリンピック選手でも、障がい者でも一人ひとりが自分なりに障害観があり安易な障害観で対応してはいけません。たとえば、同情心、感動話、頑張り屋さんなどの先入観で対話し接する人が多い。同じ人間です。壁は厚いです。

最後に、学校ではコロナ禍パンデミック下で修学旅行・課外学習・授業さえできなかったのに五輪が無観客で開催されたことも忘れないでください。

参考文献『五輪と戦後』河出書房新社 2020・4月

3. 未来の希望は教育から— AI について(3)—

過去・現在と書いてくると、私の性格に原因がありますがどうしても批判的に悲観的になったりします。もっと現実肯定のほうが楽ですし、心情的にも安定します。

それで未来は希望というか夢であっても明るくしたいという願望で書いています。「未来は若者に託す」のですがそのためにも思いを伝えたい。今回もそれと関連して「AI・人工知能」にしました。

「AI・人工知能」は様々な分野で実現活用されています。車・ロボット・作業現場など人間の労働や将棋・碁の頭脳ゲームなど明るい話題も多い。さらに医療の分野では薬の開発、診断、治療、遺伝子解析、ガン治療までされ「AI・人工知能」がなければ医学の発展は望めない。コロナの予防接種ワクチンの開発が従来の開発期間より驚異的に短かったのもこのお陰です。このように「AI・人工知能」の技術が進めば未来は明るいでしょう。リモート学習・ホームワークが出来るのもこのお陰と考えます。

ただし、マイナスや懸念される事も沢山指摘されていますが一つだけ紹介します。川島東北大学教授によればスマホを使えば使うほど学力が下がるという説です。理由として

- ・睡眠不足
- ・テレビ・ゲームの影響
- ・脳の発達に影響
- ・長時間使用
- ・ながら勉強
- ・スマホ依存症

など指摘しています。私の経験でもスマホに限らずうなずけることです。家庭の育て方、学校の在り方と指導、社会全体の方向性、など一体となって解決することが大切です。なお川島教授は「脳トレ」シリーズの作者で本はベストセラーになりました。

最後にスマホはこれからも進歩し便利になるでしょう。期待したい。マイナス面をぜひ点服して人類の未来を照らしてほしい。

参考文献：川島隆太著『スマホが学力を破壊する』集英社新書 2018 刊